

Title	汉语位移表述中路径成分研究
Author(s)	李, 梓嫣
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88126
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (李梓嫣)

論文題名

汉语位移表述中経路成分研究
(中国語の位置移動表現における経路成分の研究)

論文内容の要旨

本研究では、現代中国語における移動表現の経路を対象に、認知意味論の視点から考察を行う。Talmy (1975) の定義によれば、経路 (Path) とは「移動または存現事件における、ある物体が他の物体に対して移動する際に従うルートや占める位置であり、その占める位置は存現事件を移動事件の極端な状況と見なすことができる」である。これまでの中国語移動表現の研究において、移動動詞の意味・移動方向や結果を表す動補構造（「動詞＋補語」構造）・方向を示す前置詞・後置詞構造の構成と意味に注目した研究は多く見られるが、移動経路の特徴や表現については未だ十分な研究はなされていない。本研究では、現代中国語移動表現における移動経路の構成・特徴及び表現方法（第2章）、移動動詞の意味及び文法的特徴（第3章）、移動動詞と動補構造の組み合わせパターンと動補構造の経路（第4章）、移動に関する前置詞構造（後置詞構造も含む）の意味と特徴及び前置詞構造と動補構造との異同（第5章）に着目し、言語成分の置換と比較という研究方法を通して考察する。

本論文は全6章で構成されており、各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本研究の研究動機及び研究内容を明らかにし、これまでの研究成果を整理する。

第2章では、先行研究に基づいて、中国語移動経路の構成を分析し、経路の表現方法をまとめる。中国語の移動経路は、主に原点・終点・方向の3つの要素で構成され、原点と終点は「基準点」とも呼ばれる。人の認知によって捉えられる物事は「最初の状態」を原点として認知されるため、起点に関する情報は提示しなくてもよい状況が多く、終点と方向の2つの要素のうちいずれかを認識することで、経路を構成できる。原点（ある時は認知上の「最初の状態」）と終点の両方で構成される経路は「離散的な経路」と呼ばれ、1つの基準点（原点または終点）と方向で構成される経路は「連続的な経路」と呼ばれる。終点の有無は事件が自然に成り立つかどうかで決まるため、この2種類の経路の間には「有界」と「無界」の対立関係が見られる。中国語では、移動経路を表現する際、経路移動動詞、経路補語、経路前置詞構造（後置詞構造も含む）、名詞性成分の4つの方法が使用され、この4つの方法にはそれぞれの適用範囲や文法的特徴がある。経路動詞は主に文の主動詞として位置付けられ、その経路の類型は動詞の意味で決まる。経路補語は動補構造の補語であり、通常は離散的な経路を示しているが、“来・去”のような直示動詞と共に起す際には、連続的な経路を表現する場合もある。前置詞構造は、文の主動詞の前にも後にも置くことができ、一般的に連続的な経路を表す。なお、原点を提起する場合は、前置詞構造しか使用することができない。名詞性成分で経路を表す時、その名詞が指し示すものは、認知上線形であるか、習慣上移動の終点であることが必要である。

第3章では、移動動詞の意味的・統語的特徴について考察する。移動動詞は、経路の種類によって、経路無し移動動詞（I類移動動詞）、連続的な経路を含む動詞（II類移動動詞）、離散的な経路を含む移動動詞（III類移動動詞）、直示的な経路を含む移動動詞（IV類移動動詞）の4つに分けられる。それぞれの移動動詞は、構文における位置や組み合わせ方法などによって特徴が異なる。I類移動動詞は「様態移動動詞」とも呼ばれ、経路を含む移動動詞の補語と組み合わせなければ移動事件を表すことはできない。II類移動動詞は経路を含むとは言え、単独で経路が表せるのは“上・下・登・爬”の僅かな単音節語と“提高・下降”のような二音節語に限る。III類移動動詞は単独でも、他の移動動詞（III類移動動詞も含む）の補語としても、移動の経路を表すことができる。IV類移動動詞は普通“来・去”を指し、その経路の類型はIII類移動動詞と似ている。但し、移動表現文で目的語の後にも使用できるというのがIV類移動動詞の特徴である。なお、「到+NP_L（方処名詞性成分）」の構文において、NP_Lの方向詞（“上・下・前・后・中・里”など）の使用は、名詞の意味上の特徴と移動事件の性質に関連しているという現象が発見された。「V+到/在+N」構造において、“到”と“在”の互換性については、動詞Vの意味と構造が示す事件の性質に影響される。

第4章では、動補構造を巡り、各種類の移動動詞と動補構造との組み合わせや動補構造全体の経路とその構成要素の経路との関係について分析し、説明する。移動動詞を動補構造と組み合わせる際には、一定のルールに従わなければならない。I類移動動詞は、動補構造V1-V2と組み合わせられる際、V1の位置にしか入れない。I類移動動詞がV1となっている時、II、III、IV類移動動詞はいずれもV2に置くことができる。しかしII類移動動詞は少し制限があり、“上”と“下”の2つのみV2に置くことができる。II類移動動詞は、V1とV2のいずれにもなることができるが、I類移動動詞と同様に、V2に入るのは“上”と“下”に限定され、その時、V1に置くことができるのはII類移動動詞の“上”と“下”以外のものまたはI類移動動詞のみである。また、II類移動動詞がV1に入る場合、V2にはIII類移動動詞もIV類移動動詞（特定の条件を満たす時）も使用できる。III類移動動詞とIV類移動動詞は、V1とV2のいずれにも入れるが、V1として使う場合、一般的には、その補語のV2もIII類移動動詞またはIV類移動動詞であることが要求される。IV類移動動詞の意味構成は、単独で使用する場合は「直示経路＋一般経路（非直示経路）＋移動対照物」であり、「一般経路」は離散的な経路の特徴を表す。この時、移動対照物の情報が含まれているので、“来・去”は方処成分と組み合わせる必要がない。IV類移動動詞を動補構造の補語として使用する場合、その意味構成は「直示経路＋一般経路＋移動対照物」となる。V1がI類移動動詞であれば、「一般経路」は離散的な経路として表現され、V1がII類移動動詞または“到”以外のIII類移動動詞の場合、「一般経路」は連続的な経路となる。V1が“到”の場合、「一般経路」は離散的な経路となる。IV類移動動詞をV3として使用する場合、動詞の意味構成は単一の直示経路であり、このIV類移動動詞は移動事件の客観的な事実に影響せず、移動主体と観測者との間の位置関係を提示するのみである。動補構造全体の経路は、一方的に構成方法や構成要素の経路的特徴の影響を受けるだけでなく、動補構造自体もその構造内の置かれる位置によって異なる動詞の特徴を顕在化させている。最後に、移動表現における“来”と“过来”の共通点と相違点についての考察を行う。主動詞として単独で使われる

“来”と“过来”の互換性は、文が停止、禁止、否定の意味を表現しているかどうかと、移動の主体が発言現場に存在するかどうかに影響される。また、“来”と“过来”が補語として使われる場合、その互換性は主動詞の音節数と動詞の意味の影響を受ける。

第5章では、移動経路を表す前置詞構造（後置詞構造も含む）に関する問題を取り上げる。前置詞構造で表現される経路は、意味論に基づいて、方向・追従・模写の3つに分けられ、その移動経路はいずれも連続的な経路である。前置詞構造中の方処成分は、方向名詞・位置名詞・普通名詞のいずれかである。前置詞構造は通常、文の中で前置（主動詞の前に）される。また、“向”や“往”といった方向を示す前置詞構造は、前置される他に、後置される場合もある。方処成分の性質や主動詞の音節数や目的語・補語などの他の補助成分の有無が前置詞構造の後置の可能性に影響を与えると思われる。経路を表す前置詞構造は、経路を示す他の言語要素と組み合わせることができると言っても、各種類の移動動詞・動補構造と組み合わせる可能性は異なる。具体的に言えば、経路を表す前置詞構造とII類移動動詞及びIV類移動動詞との組み合わせは比較的自由だが、III類移動動詞との組み合わせは制限され、動補構造との組み合わせは、一般的に、V3の“来・去”がない（目的語の後には補語がない）ことが要求される。

第6章では、本研究の成果をまとめた上で、今後の課題について述べる。今後は、以下のような分野での研究が期待される。第一に、認知科学の視点から、各経路表現方法の特徴を分析し、各表現方法と認知との対応関係を見出す。第二に、経路動詞のより精緻な分類をした上で、二音節の移動動詞の特徴とその文法的な組み合わせパターンをまとめて、分析する。第三に、経路前置詞項のより詳細な研究を行う。第四に、抽象的な移動事件（Virtual Motion）に対する研究に着目する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (李 梓 嫣)			
論文審査担当者	(職)	氏 名	
	主 査	教 授	古川 裕
	副 査	准教授	鈴木慎吾
	副 査	准教授	中田聡美
	副 査	教 授	林 初梅
	副 査	准教授	王 周明

論文審査の結果の要旨

《汉语位移表述中経路成分研究》(中国語の位置移動表現における経路成分の研究)と題する本論文は、現代中国語で位置移動を言語化するときの経路(path)の表現に焦点を当てて、その特徴を認知意味論的に論じたものである。英語研究や日本語研究と同じように、中国語研究においても移動の言語表現については既に数多くの優れた先行研究があるが、その多くは主として原点(起点)、着点(終点)、移動方法などに重点を置いた研究であり、移動の経路に的を絞った詳しい研究は未だ十分ではない。本論文は、従来の研究が残している空白を埋めようとする意欲的な研究である。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章「研究課題と背景」では、本研究の動機、研究内容とTalmy(1975)を中心とする主な先行研究を紹介している。

第2章「中国語の経路の性質と表現方式」では、現代中国語の移動表現における経路の表現方法を分析している。ここでは、「離散的経路」と「連続的経路」が区別され、それが「有界」と「無界」の対立を反映していることを指摘している。また、経路表現は経路移動動詞、経路補語、経路前置詞構造、空間名詞成分の四つが使用されること、そして原点(起点)を提示する場合には経路前置詞構造のみが使用されると述べているが、この指摘に対して“下岗”(職場を/から離れる:レイオフ)や“出院”(病院を/から出る:退院する)などの起点目的語が反例として容易に想像されるのは問題である。

第3章「位置移動動詞の分類と性質」では、移動動詞の意味・統語的特徴を考察している。ここでは、経路の種類によって移動動詞を経路無し移動動詞、連続的経路を含む移動動詞、離散的経路を含む移動動詞、直示的経路を含む移動動詞の四つに下位分類し、それぞれの表現特徴を詳しく述べている。中国語の学習者にとって難点となる“V+在+N”と“V+到+N”を比較対照している点は評価される。

第4章「位置移動動詞の組み合わせ:動詞補語構造」では、動詞に補語として後接する成分の特徴について、前章で下位分類した動詞各類を取り上げて様々な補語との共起可能性を考察している。ここでも中国語学習者を悩ませる“来”と“过来”の互換性を述べている点を評価できる。

第5章「経路を表わす前置詞構造」では、経路を表わす前置詞構造を考察している。ここでは、前置詞構造が方向・追従・模写という三タイプの経路を表現することを多くの実例を挙げて述べている。また、前置詞構造が移動動詞に前置される場合と後置される場合とがあるが、この語順の違いを左右する原因についても述べている。

第6章「結論と研究の展望」では、この研究で得られた結論をまとめて、今後の研究課題について述べている。特に、抽象的な移動表現(Virtual Motion)をめぐる研究を今後の課題としている点が注目される。

本論文は上述のように、従来あまり注目されることがなかった移動の経路に焦点を当てて、中国語ならではの表現特徴を明らかにしようとした意欲的な研究である。その意欲のあまり武断と感じられる判断も散見するが、実例を豊富に収集して提示し、幾つかの興味深い言語現象を発見したことは高く評価することができる。

このように、本論文は新規性のあるテーマを選び、実証的に論を展開した優れた研究の成果であり、本審査委員会は全員一致で本論文が博士(言語文化学)学位を得るにふさわしい論文であると評価した。